

村山籌子の評伝の試みをめぐって ——聞き書きのこと（続）の2——

山 崎 怜

前回に続いて聞き書きを印刷する。約束にしたがって「ナップ時代の友人による」とMAVO時代の住谷磐根（すみや・いわね）、主治医の塚原俊雄を掲載したい。時代の関係と病歴の証言から、住谷（田河をふくむ）の聞き書きを先行させ、「ナップ時代」をそのあととするが、紙数の関係から、山田清三郎、川尻泰司、松本克平の聞き書きは次号以下となった。

また、「ナップ時代の友人による」はすでに他大学の紀要に発表したものの続編であり、番号をつければ通し番号となる。しかし、別の紀要分からの続き番号は混乱を招きかねないので番号は改めて今回は（1）からはじめたい。

そこで参考のために既発表の「ナップ時代の友人による」をここで紹介しておきたいと思う。

第1回 河野さくら 第2回 河野さくら 第3回 鹿地亘（『日本福祉大学紀要』第95号、文化領域、1996年8月）、第4回 川口浩、松井圭子ご夫妻、第5回 川口浩（同誌、第96号、文化領域、1996年12月）第6回 佐々木孝丸、第7回 山崎功、第8回 永田一脩、第9回 まつやま ふみお（証言）（同誌、第99号、文化領域、1998年8月）、第10回 猪野省三（同誌、第100号、文化領域、1999年3月）

このほか、直弟子の宇野重吉、陣ノ内鎮、松尾哲次（演出家）なども「ナップ時代」と重なるのだが、「直弟子」シリーズとして別に記録している。しかし、ここでは、既掲の誌名や発表年月についての紹介は省く。

村山籌子

——MAVO時代——

話し手 田河水泡氏（電話）

1986年8月2日（土）

（前書）

手紙を2回ほど出したが、ご返事がなく、やむなく東京出張の折に電話することとなる。（「人に歴史あり」で、村山の友人として出演しているのが田河）お嬢さんが出て来て「高見澤潤子ですか？」という。「ちがいます」というと「父ですか？」というので、「はい、水泡先生です」というと「父を呼びますから」といい、しばらくして水泡氏が電話口に出られる。「あなたは？」といい、さきほどお嬢さんに申し上げたように、高松の山崎である。2度ばかり、お手紙をお出ししたのですがというと、「ああ、覚えている」「それはほくも籌子さんに会ったことはあるが、ほくはあまり話す材料がないんだ。それより、ほくの友人でもっとも適切な人物を紹介してあげるよ、かれは籌子さんをよく知っている。十分に役に立つ筈だ。

それでいうよ、友人の名を。かれの名は住谷磐根（すみやいわね）、住所は（中略）、電話はね、422-247、これおかしいね。番号がひとつ足りん、しかし、今、これしかわからない。山崎「422は都内番号ではありませんか？一寸おかしいですね。42の2247ですか？」「いや、わからんね。これあなたから調べて下さいよ。イワネはね、ロシア人の名前のイワネフとゴロあわせなんだね。この人なら、あなたに有益なこと、大切なこと、しゃべってくれる筈だね。」「その方はどんな職業ですか？」「かれは絵かき（画家）です。MAVO時代の生き残り。のいま4人はいるが、イワネが一番よい。かれに是非ききたまへ。では。」

これで電話は切れる。このあと早速NTTにTelして保谷市の住谷先生宅のTelをたしかめた。

判ったことは（中略）

この番号によってお茶の水日立製作所前の公衆電話から住谷氏に電話する。

すぐ出て来られて、こういわれた。

「ああ、村山君のオクサン、よく知っている。小川未明が、ことばをえらんでいると大変ほめたことがある。ぼくはかれらの結婚式に出たし村山君の美術についてはよく書いたが、^{かずこ} 篝子さんについてはかいたことはない。しかし、よく知っている。すばらしい人だ」と、たてつづけにいわれた。

途中で「家内が10年来病気で椅子の生活。いまも台所でぼくが夕食の用意をしている。一寸待ってくれ、煮たきの火を見に行く」といい、そのまま待ち、再度電話口に来て「村山君とはMAVO時代、ほんとうにつきあった仲だ」とたてつづけにいわれるので、山崎は途中で話を切ってもらい、「明日の日曜日におじゃましたいが如何か？」というところ「かまわぬが家内が動けぬので何の、おかまいもできぬが…」といい、こちらは「いっさい、かまわないでほしい」といい、ゆき先の住所を指示して貰う。これまた親切。「それは、国電のムサシサカイ北口下車。屋根のあるバス停。（後略）」

話し手 住谷磐根氏

1986年8月3日（日）午後2：00～8：30（ご自宅にて）

Sは住谷氏、Yは山崎。文責はすべてYにある。

Y 今日。おじゃま致します。

S どうぞどうぞ。

ぼくは有名にならないで生きたいので苦勞しているんだよ。有名にならないというのもむつかしんだね。（とってって大声で笑いながら家に入れてくださった。）

Y 先生のご出身はどこですか？

S 群馬県だ。

Y 住谷悦治先生との関係は？〔住谷悦治は同志社大学総長もされた経済学史の専門家。山崎と同学である。〕

S あれは兄、実兄です。ぼくは実弟です。

Y そうですか？悦治先生は専門が私と同じで、学会では遠くからみておりました。

S ぼくの家は^{ようざんか}養蚕家。素封家でした。叔父の渋谷天来ね。兄の悦治が尊敬していた叔父です。

Y 本にもかかれていますね。悦治先生がしばしば。

S そうです。あの叔父はトマス・カーライルの『英雄崇拜』のほんやくをしています。廃娼運動をした^{きょうあい}り、女子教育に関心をもち、前橋に共愛女学校をつくり、アメリカの3家族を異人館に入れたり〔この

あたり、早口で記録を正確にはとれず] 教会牧師 [の養成か、本人が牧師役をつとめたか、ききとれず]……。ぼくの名前も叔父がつけたんだよ。

一彦君はよく出来て成績優秀だが体育ができなかった。かれは天来の影響をうける。感化された。
〔住谷一彦は悦治の子息で経済史学者、経済思想の専門家。立教大学教授。山崎と同学。〕

Y 悦治先生はご病気でしょうか、いまは学会にもこられません。

S 兄は恍惚こうこつの人になってしまった。残念なことです。天来の伝記をかく資料を一杯もっているのに。その前の学長職もこの仕事をさせなかった。

父は兄が仙台の二高（旧制）時代、仕送りに月70円を兄に送金して父はふんばつしていました。

Y 先生は何年うまれですか。

S 村山君は1900年、自分は1902年です。〔山崎は村山は1901年と思うが、申し上げなかった。〕

あの、ぼくは第二高校（旧制）の兄（悦治）とは壁を作って、わざとはなれていたのです。

住谷三郎という兄がいて和歌を投稿したりしていたが、悦治と話をして、三郎を住谷家のあとつぎに決めました。そうきめたのですが、三郎は50歳台で死去しました。自分は分家せよといわれました。

自分はセタ農林学校に入学したんです。ここは50人しかとらない。相当の家の人間の、あとつぎがはいる学校でした。小学校の一番がはいる。自分はそうではなかったのですが。

Y 絵の方は？

S 絵が好きで、描きたくてたまらず、上野の展覧会に出したら入選した。入選を確かめるために120kmのみちのりをひそかに夜中に自転車で走って一番早く到着して入選した自分の絵をみたのです。

Y そんな距離を？

S そうです。大正8年の日本水彩画会に入選。大正9年の日本水彩画会にも入選しました。

ぼくの名はイワノフ・スミヤヴィッチというのですよ。

現在、MAVOの生き残りは4人いますよ。加藤正雄（早稲田出身、建築家）、住谷磐根、田河水泡、それに戸田達雄の4人です。戸田は童画、エッチング。

Y みなさん何歳位ですか？

S 加藤は89歳ですよ。

キュービズム展をやりました。

Y それらの作品はみられますか？

S 小学館の現代日本の美術8（前衛美術）をみて下さい。ぼくは陶磁器を絵にかいている。これですよ（といわれて）（陶磁器をかなり写實的に描いた掛け軸をみせていただく。）

Y なるほど。〔それは磁器そのものの絵ではなく、出来上がった陶磁器を絵に画いたもの〕

写實的に忠実な絵ですね。MAVO時代のとはちがいますね。

S そうです。美術だけの貧乏暮らしで生きてきたのはぼくだけだよ。

Y 籌子さんのことに再びうつらせて下さい。先程の入選の頃から……。

S あの日本水彩画の入選ですが、これは登竜門だった。

ところで意識的構成主義的展覧会、これは村山の展覧会です。矢橋公磨やばしきみまろ、本名は丈吉じょうきち、この人は画家です。この矢橋やばしがムラヤマの展覧会にぼくを案内した。

ぼくは大正11年3月、進学もしません、金ももらわない、好きなことで暮らさせて下さいと親たちについて、20円の小遣いをもらって上京しました。

池袋で家をつくり、昭和2年長男、昭和7年長女がうまれました。そんな中で村山の絵をみて、これ

にびっくりした。あの三角の家にも矢橋君と共に行ったんです。本が天井まで一杯あり、画もまたすごいし、^{ぶんぼう}文房堂での作品とちがうのもみてこれまた感動。こちらは、どちらかといえば写実的作品だ。

その頃、立体派、日本表現派、八大社というのもあった。水彩で尾竹紅葉、普門暁〈ふもん・あきら〉という未来派美術協会の人が出て絵もうまかった。当時、東郷青児はヨーロッパ遊学中でした。

当時の村山はいつも「芸術は空間のクリエーションだ」といっていて、このことばに自分は共鳴したのです。

Y 童画の方は如何ですか？

S 子供の絵は子供の雑誌です。知義はオカッパ頭。眉目秀麗でね。魅了的だった。籌子さんもオカッパでしたね。

羽仁家の仲間のトムさん、その一高での友人森五郎が羽仁説子とむすばれて当時、評判になる。森家は桐生の椎茸産業の^{ぬし}主で、椎茸の会社をつくった。そこの五郎が羽仁五郎となって当時の話題だった。

村山もその仲間で意識的構成主義。かれの家には松井しづ子、秦きよ、音楽家の浜さんが遊びに来て籌子さんといつも話をしていました。

小川未明が籌子の文章をほめていました。村山と籌子さんは肉体上の結婚をしたわけではありませんか？ ある人は、思想上の理由で仲人をことわったのです。〔このある人とは誰であるかを住谷氏はいわれなかった。あえて沈黙した趣である。山崎の調査では藤井武師と思われる。〕

それで羽仁もと子、羽仁吉一が仲人になりました。自由学園で結婚式をしました。

Y 結婚式にはMAVOのみなさんがこぞって出席したそうですが、誰が出席したのですか？

S まず小松清^{きよし}、小松耕輔^{わだち}の弟です。次に和達、これは天文学者の和達の兄です。村山と一高で同級生です。それから、田河水泡^{たかみ}（本名、高見澤路直^{ざわみちなお}）、私（住谷磐根^{ざわせいちょう}）、それに澤青鳥^{さわせいちょう}。澤はロシア語をやり、グライダーの研究をやった。6人目は山里永吉^{やまざとえいきち}、MAVOの同人。のちに沖縄に帰り、沖縄で館長になりました。かれについては勁草書房から出た『沖縄物語』をみるとよい。かれは戸塚の美術学校に学びました。

結婚式では、住谷にMAVOを代表して弁説をやれといわれた。ほくは弁が立つといわれて、やれやれといわれ、テーブル・スピーチをしました。

Y どんなことをのべられたのですか？

S スピーチでは村山の芸術的才能をほめました。また籌子さんについては、よく本をよんでいる。北欧の文学をよみ、ジャン・コクトオもよんでいる。読書のハバがひろくてふかいことをのべました。

Y その後はどうされたのですか？

〔昭和一桁時代が全く述べられていない。しかし深追いはしなかった。〕

S 村山たちとはなれて従軍画家になる。昭和12年11月。自分は陸軍の従軍画家を志したが、その制度がないといわれた。海軍は募集しないけれど、ほくはこれに志願したのです。教え子に（岩倉具視^{とみみ}のヒマゴの）岩倉トモカタがいます。かれはザポの攻防で10月14日に戦死。従軍画家としての岩倉についての記事をほくは報知新聞にかきました。

ほくは画壇がいやになったのです。審査員がア、ウンで入選はできる。コネできまる。誰が特選になるか、はじめからわかっている。これがイヤになった。ほくは外野になりました。画壇からはなれて、山登りをして山の絵をかき、銀行などに買ってもらう。社長がかってくれるのです。

戦争になって、従軍画家を希望したのです。それを聞いて叔父^{おこ}が怒ったのです。海軍従軍画家になったといったら怒ったのです。のちには叔父はほくが画いた絵（中国の門柱）に漢詩をかいてくれました。

「この門は平和な友好のことばで開かれる」といったことばなのです。

昭和7年だったか、村山から篤子さんのお母さん（実母）の絵（肖像）をかいてくれといわれて描いたことがあります。レイバーンの大きさです。写真を貸してくれまして、それをみながら肖像画を描くのです。結局、気に入らなくて未完のままにおわたったのです。それはもと私への経済的援助であったかとおもいます。〔知義の配慮・昭和7年は篤子の母、寛の逝去の年である。〕

Y その写真はどうなりましたか。

S それは不明です。

Y 結婚式でうたったというサンヤンカネとは何でしょうか？

S サンヤンカネは村山の『自叙伝』のことばでよい。あれはわかれのうたで遊ぶゲームなんです。スキーの猪が谷の父のイガヤさんがジャワで習ってきたのです。あれは車座でゼニわたしをする。新劇連中が赤木でなってきたのです。これを住谷がならった。（赤木というのは赤木山かどうか）

そしてMAVOのうたになった。MAVOの連中は「今日は」とか「さようなら」の挨拶もサンヤンカネで得意がった。

今日は、サンヤンカネ（逢ったときは「今日は」を止めてサンヤンカネという。）

さようなら、サンヤンカネ（別れるときも「さようなら」を止めてサンヤンカネという。）

（ここで住谷氏はこのうたをうたわれる。よくおぼえておられる。すべてのフレーズをうたわれた。）

〔これは録音すべきであったが、後の祭り〕〔じつに楽しそうなたである。〕

Y 村山知義さんについてどんなことをおもわれますか？

S 村山は包容力がある。プライベートを侵害しない人。珍しい雑誌をつぎつぎによみ、知らない話を一杯知っている。その読書力におどろく。近くで人が騒いでいても静かにしろなどといわないで本がどんどんよめる人。

自己にきびしいし、自己主張をやっても、しづかにする。やかましくはいわない。ユーモアもある。

みんながタムロしている所で、いつのまにか自分ひとり何百ページの本をよんでいる人です。またおらかでもある。自己を大きくしない人です。

Y 篤子さんはどうでしたか？ うつくしい人でしたか？

S 親しみのある、気取らない人。もとからよく知っているといった思いをのこす人。よそよそしきがないのです。呵呵大笑しない人でした。ほどほどを心得ているような人と思えましたね。

〔美人かの問いには直接にはこたえられない。住谷の人柄が思われる。〕トムさんのMAVOは創刊の祝いで爆発を意味する花火の表紙で発禁処分となりました。ぼくらはMAVOの展覧会のためにトラックの荷台にのってMAVOの宣伝をしました。東京中をのり廻しました。これも村山の発案です。

Y MAVOの歴史をかいたものはありませんか？

S ない。自分に書けといわれていますが……。

Y いまは何をなさっているのですか？

S 掃苔会（会長 森銑三氏）で墓の研究をしています。また、大調和会にはいっています。これは武者小路実篤氏の会です。

ぼくは村山とのつながりがMAVO時代中心なので、村山の芝居や後半生にはほとんど関係がない。村山の自叙伝の第2巻あたりが関係あるので、これをもっている〔といわれて第2巻をみせていただく〕んです。

ですから、村山の芝居の本やその他の本は必要なものではありません。

そういう本はぼくはもつ必要はないのですよ。また、とくに興味もない。そしてどうしても必要なときはどこかへ読みに行けばよいと思っています。

Y 村山さんの生き方や思想とのちがいはどのように考えられますか？

S ぼくと村山は友人なので、友人というものは主義や思想とはちがってもつきあえるもんだよ。村山はスケールの大きい人物だから、そんなことは関係ないよ。第2次大戦後も友人として年1回のMAVOの会や、ここにある村山の「人に歴史あり」(司会 八木アナウンサー)の番組に田河水泡、戸田達雄といっしょにテレビに出ているんだよ。めったにこういう話をいっしょにすることはないので、テレビの人にたのんで、写真をもらったのです。6枚位あったが、ここに4枚ある。田河なんかにやったんだよ。

Y 田河さんはどうして山崎に逢ってくれないんでしょうか？

S 田河は、君のような人物があらわれると、すぐにぼくなんかに紹介して、自分は知らぬ顔の半ペエーを決めるんだ。ゆかしい人なんだ。この座談会なんぞの時でも“ぼくは絵の才能がなくてたまたまマンガ〔「のらくろ」のこと〕をかいて墮落して金持ちになった。住谷は絵かきつづけて本物なんですよ”なんていったわけ。あとは無言なんだ。かれはそういう人だよ。

Y あの方は高見澤潤子さんと、どうして、どういう経緯で結婚されたのですか？おくさまは小林秀雄さんとごきょうだいなんですわ。

S それ(結婚の事情)はきいたことはない。ぼくは本人がいわない限り、ルーツはきかないんだね。しかし、どんな風に結婚したんだろうな。

[話が一段落して、住谷氏は『東郷』という雑誌を持ってこられた。]

S この中の俳句などをぼくはやっているんです。

[住谷氏は大変な海軍狂で海軍を大変ほめ、陸軍より10年すすんでいるといわれる。海軍にのめりこみである。陸軍をとくに批判しない所に特徴(というか)、善意はあるものの、大変な海軍狂である。こうした人がMAVOの一員だったことに興味をおぼえる。従来の籌子にまつわる人とは全く異なる、異例の人物であったことは重要である。]

家内がこんな具合なので〔動かれない。椅子にじっと座られているのみ〕ジャーナリズムや見知らぬ人とつきあわないことにしている。つきあいは家内がいそがしくなるんでね。もともと家内は丈夫な人をとおもい、そうであったつもりが、40歳代、50歳代と病気がちで、10年前に、そこの〔指さす〕敷居でつまづいてころんでからは全く身動き自由にならなくなってしまったんだね。

Y おくさまのおことばづかいはじつに、みやびで、ていねいですね。

S 昔から、そうなんだ。藩の娘のせいかも知れんな。

Y 一彦先生とはゆききがあるようですが……。

S うん、あそこはここからも近いんだよ。バスでゆけばすぐなんだ。向うは車を運転してやってくるし、オクサンの運転でもくる。しかし、あれほど活躍していると忙しいんだ。儀礼的な訪問は全くないね。むしろ、ぼくの方がたまにゆくことがあるよ。

かれのウェーバー〔マックス・ウェーバーのこと〕はぼくの所にも送ってくるよ。かれは原稿料をもらう仕事は学問上はムダな仕事らしい。与えられた人生の貴重な時間をムダにスリ減らしたくないんだね。なかなか大したもんだと思う。

籌子さんの話はこれ以上は(もう)とくにないから、おわったよ。あの頃、村山君のところへ行ったら籌子さんがいたのでお顔はよくみました。千金丹の娘ということだったが、これはあなたの方がよく

知っていることだ。

Y 村山さんの浮気とか夫婦関係について何かご意見はございませんか？

S そういうことは全く知らない。若い村山には多くの女性があこがれて、その中で籌子さんがとくに村山にあこがれ、あこがれが嵩じて事実上の結婚に進んだのではないか？

〔山崎の印象では、村山が左翼運動にはいつてゆくにつれて住谷さんは村山知義から離れて行ったことが言外にでている。これはのちに垂土に逢って垂土のことばかりも十分に察しえられる所であった。〕

S 先ほども申したように、ぼくは美術家になりたくて上野に入選したり、日本水彩画会に出品したりしていましたが、入選の賞や選考が「ア、ウン」ではじめからきまっているという所がイヤになり、離脱して山に登り、一人ぼっちで山の絵を画いて過ごしたんです。それをみんなに買ってもらうわけだ。

そうして海軍従軍画家を志望した。海軍は募集しないので、こちら側の志願のみでやるわけだ。そうして、ぼくは中国各地をさまよって、その景色を絵にしたのです。

Y 戦闘の場面ではないのですか？

S ぼくはあまりそういう絵はかかなかった。〔このあたり、はっきりしない。〕

ぼくは何しろ、ああいう非戦論、マルクス論の兄弟だし、叔父が天来で平和と信仰の人だったからね。

ぼくは、いま従軍画家としての思い出を文章として連載しているんです。ぼくとしては力を入れています。

〔といわれて『火星』とかいうタイトルの小さな雑誌を持参してみせてくれた。それは30回目位のもので、おわりに近づいた個所であるとのことである。〕

Y 先生の絵は高価なんでしょう？

S いや、タダというわけにはいかんが、タダみたいなもんだよ。もうお金をもってあの世にゆけるわけではないし、こんな生活の足しになるか、ならんか位でよいんだよ。〔住谷氏は目をすえて、とうとうとしゃべられる。その発言のエネルギーには舌をまいた。これには大抵の人が疲れをおぼえるにちがいないと思われた。善人典例の人である。〕

〔この日は中華焼ソバをごちそうになった。日本そば屋は休みであった。途中で近所に住むお嬢さんがこられて何か買い物をして届けてくる。〕〔そのとき、住谷先生曰く〕

S 女の子は親孝行だ。(女の) 子供がうまれると軍艦がうまれるというのが軍艦がいい。大砲の息子は全くよりつかない。〔とニヤニヤ笑いながら〕これはね、男は嫁さんに任すとお家安泰なので女房のやるままに任すのでこうなる。男の操縦術なんですね。〔と苦笑される。〕

〔つぎに一枚100号の大作の話があった。これは印度での彫刻の絵で、300万円で売ったようだ。アメリカ人の客(実業家)がそれを見て買いたいといい出し、売ったという。西海岸のビジネスマンだそうである。〕

S あとでマケテくれというので送料6万円分をまけました。その実業家がこれはどこで画いたかというので印度各地のものを自分が構成したのです。この人はあとで印度へ行きその実物を各地でみたと僕に手紙をかいてきたことがあるという。〕

S 自分は画仙紙にかくのです。これは自分が発明した技術で苦勞して得たものです。しかし、大きさが大きくなればなるほど大変なのだ。これがぼくの名刺ですよ。〔と言われて名刺を示された。〕このようにぼくの名刺は東洋画家となっているのですよ。東洋画は西洋画でも日本画でもないんです。画仙紙に書くんですよ。

Y 今日長時間ありがとうございました。

S またお話したいですね。なお、近くぼくの本もお送りしますよ。〔この本はのちに送られ、山崎は礼金とお礼状を差し上げた。〕〔この日は、握手をくり返して、バス停まで来られ、長い時間バスが来るまでそこにおられた。熱血漢そのものの人であられた。〕

Y ご親切は身に染みます。奥様のご健康がご快復することをつよく願っています。

S いや、これはなおらないのですよ。

Y 私には分かりませんが、ともかく、お大事になさって下さい。

S どうもありがとう。なんのおかまいもせず。

Y いいえ、おごちそうになりご迷惑ばかりおかけしました。

S お役に立ったかな。昔のことだから……。

Y じつに当時のことがあざやかです。籌子さんの結婚式のことなど、先生ならではのお話ですし、籌子さんのお母さん〔寛〕の肖像の絵のことなど初耳でした。その絵が完成しておればよかったのと思いました。

では失礼いたします。〔重ねて今日は〕ありがとうございました。

〈あとがきに代えて〉

住谷氏は初対面の私に対して、籌子研究ということで、私には知る所を自由にお話しいただいた。その寛やかな人柄といい、体験といい、MAVO時代のことをかくしだでもなく、開陳いただいたのである。出会い後にも自著を送られ、東洋画なるものを教えていただいたことも忘れられない。

私はその後、学会で会員である住谷一彦氏にお目にかかり、叔父、磐根氏から親しくMAVO時代のことを語られたこともお伝えして一彦氏と私は叔父上の感懐を共有したのである。

さらに、その後、1991年7月13日に浜離宮近くの朝日ホールで村山知義90周年記念「偲ぶ集い」（これは大集会であった）が催されたとき、住谷磐根は特別に招待されて一場のスピーチをされた。住谷は知義を回顧して、「芸術は空間のクリエイションである」とする当時の知義の演出で田河水泡らと人間のヤグラを裸同然で作り、その後も画家として空間を再現し、今も90歳ながら東洋画家として宇宙空間を創造していてMAVO時代のトムさんに生かされつづけているとし、その後の村山は芝居という舞台空間のクリエイションに励んだと挨拶され、本日はこのまま、高齢だから失礼して辞去したいといわれつつ、拍手の中を直ちに退場された。私の脇を東京芸術座の関京子さんの案内で通られたので、お話をしたいとつよく願ったが、それがかなわなかったことをいまも残念に思っている。住谷は一言でいえば、前言もしたように善人を地でゆく人であった。サンヤンカネの歌のとき、「それをうたっていただけますか？」というのと、「はい、やりますよ」と直ちにうたわれた姿が忘れられない。

村山籌子

——主治医 塚原俊雄氏にきく——

（小石川の診療室にて） 1973年10月28日

16時30分～19時20分

（前言）

塚原氏は村山知義の同級であり、結核の専門医として開業する「町の医師」であるが、全国的にもトッ

プクラスの結核医といわれた人である。籌子はこの塚原医師のみを全面的に信頼した。以下、Yは山崎、Tは塚原先生、文責はすべて山崎にある。

Y 今日ありがとうございます。はじめに失礼ですが、お生まれはいつでしょうか？

T 明治33年（1900年）2月14日です。

Y 大学のご卒業はいつでしょうか？

T 大正15年です。開業は昭和7年末でした。自分は中学時代、旧制高校、大学を通じて村山（知義）君と同級なんです。高校ではこちらは理科、向うは文科だったので、知りあいでしたが、そのときあまり関係なかったのです。戸坂潤も同級だった。

Y そうすると、開成中学、旧制一高、東大とすべて村山知義と同級だったのですね。

T そうです。それもあって籌子さんが病気となり、かれが妻をつれてこられ、再会となり、同時に親しくなりました。

昭和11年頃、喀血され、籌子さんを診察しました。村山君と二人でこられたと思います。治療として、気胸をしまして、具合はよくなりました。ところが籌子さんは神経質で、また、わがままでした。というのも私はそれを止よしなさいといったのに、パーマネントをかけたいといい、のぼせたのか、また喀血をくりかえしたのです。

Y それはいつ頃のことでしょうか？

T 戦争が激しくならない頃です。昭和12、3年頃です。高田馬場から上落合と思いますが、そこへ往診をくりかえしました。川のほとりと思います。

私が本人に治療に専念しなさいと叱責したので、機嫌が悪くなり、こなくなったのです。

じつはこれは別のことですが、思い出したことがあります。昭和7年と記憶しますが、松井志づ子さんの妹さん、久子さんがご病気になってこられました。この姉妹はふたりとも自由学園出です。そのうち、久子さんが亡くなられた。昭和8年と思います。久子さんははじめから重病でした。その折、籌子さんも志づ子さんといしょに見舞いにこられました。知義君も同じグループだったと思います。

Y 籌子さんの治療の思い出をおききたいと思います。また、具体的に病名などもお教え下さるとさいわいです。

T ロマンティシストの患者はやりにくい。感情的になる人はむずかしいのです。永い病気には忍耐とリアリズムが必要なのです。そうでないと、わるくなると、余計にわるくなりますし、よくなると、非常によくなると思いこむのです。

発病後、2年位を看たとおもいます。はじめは入院してもらいました。2、3カ月位入院したと思います。気胸しないといけないので入院中は気胸をしたのです。

気胸というのは、医者と患者とが、うまく連けいがとれていないとできない。途中で止めたんではなんにもならないのです。しかし、きっちりうまくやって成功するとも限らない。

空洞があって、ばい菌プラスの人は4年以内に80パーセントは亡くなるおそれがあり、そういう人に気胸をするのです。気胸すると、半分位の人は1年半位のちに働けるとい人がでますが、しかし、これは治ったとはいえないのです。籌子さんは空洞があって菌もあるという結核でした。これは空洞性結核とよぶものです。早い時期に空洞ができるタイプ。その型からいえば滲出性結核というものです。はじめの空洞の大きさはくるみ大より小さかったのです。

しかし、しまいには腸結核にもなりました。

Y かの女の身体について、その健康度はどうみえたのでしょうか？

T 特別にひよわともつよいともおもいませんね。ふつうです。かの女の結核は腺病質な型でなく、ふつうの人がある年齢で結核になる型です。また結核にはふたつの型、つまり（1）初期感染がつづく型（連続型）と（2）一応、初期感染がなかったか、あるいは治っていて、あとで起きる型、これは再感染型といえますが、この再感染型こそはさきほどの、ふつうの人がある年齢で結核になる型でありまして、籌子さんはこの第2の再感染型だったのです。

Y かの女のイメージをもつために、籌子さんの身体について少し知りたいと思っています。これはかの女を研究してきた私としては知りたいことですが、プライベートなことですし、医師の守秘義務ということもあり、いづらいことと存じます。しかし、私としては少しでも籌子さんを実感的につかみたい。例えば肩は、なで肩でしょうか、いかり肩でしょうか？

T 特別にナデ肩でもイカリ肩でもなかったと思います。

Y ハダは如何ですか？

T ハダはザラザラでなく、ナメラカナ人でしたね。

Y 胸はいかがですか？

T（中略）こういうことは医者としてはいえないことなので、あなたの研究の内部資料のひとつとして申し上げるまでです。

Y 分かっておりますので、気を付けます。ところで医者として看病の期間をお伺いします。

T 昭和14年から昭和20年までは見ていないと思います。はじめの2年間か3年間と最後の1年余のよう

に記憶します。
ですから、晩年の鎌倉に疎開時代にときどき往診したように思います。そのときは1階で、かの女は和室にフトンを敷いて休んでおられた。うしろに大佛さんがありましたが、本人は家に湿気が多いと気にやんでいました。

もっと療養生活にまいしんしてほしかったと思います。セロリーを食べたら、眠れないとかいっていましたが、それは療養にさしつかえはありません。はじめの1年間の気胸の効果は本人が治療に専念しないので、すでに失われていたと思います。当時は手術は一般にはしない時代ですし、かの女もそれを承諾することはないでしょう。

昭和20年の籌子さんの晩年の頃、鎌倉のお家でうどんをローラにかけて知義が籌子さんのために作っていました。そのとき、ローラをかければかけるほど（これは足踏みに類するもの）、うまいものだと知義がいていたのを覚えています。

その頃、私は世田谷の成城の家におり（当時は北多摩郡きぬ田とっていました）まして、祖師ヶ谷の富本一枝さんの息子さんの莊吉氏が胸をわるくして、息子さんを一枝さんが連れて成城の家にこられたことがあります。富本家の女性客の一団は、由木しげ子、黒田よね子、平林たい子、村山籌子でそこに一枝さんが加わってにぎやかでした。私は鎌倉へは成城から往診にでかけたのです。

一枝さんの息女である陽さん（主人は平凡社勤務）はお母さん思いで、崇敬もしておられたので、かの女に是非いろいろと一枝さんについても訊ねるべきです。

（あとがき）

塚原先生はざっくばらんで、さわやかな人であった。村山知義は「塚原君はクラスではいつも1番、成績優秀で、ぼくは4、5番ですから、かなわなかった。籌子を見てくれた恩人ですし、かの女は全面的にかれを信頼していました。かれは当時、日本でも有数の結核医です。籌子の病気についてはかれに聞くに

如かず」といわれた。

先生は私が、研究者だということで、胸襟を開いてお話くださり、村山夫婦への愛情をつよく感じさせた。先生は1979年3月31日にご急逝になった。79歳のご生涯である。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

なお、塚原先生は話のはじめに村山知義に触れて、開成中学の3年か4年のとき、校友会誌に、「グンの本能」への批判を知義が書いていたこと、また当時はその母を通じてか、内村鑑三の弟子であったことと、当時から絵がうまかったことなどに言及された。このグンは「群」なのか「軍」なのか、その後、知義氏に会った際、「群」は「軍」のあやまりといわれたが、果して校友会誌にどういう文が掲載されたか、私は調査が未だにできていないので、文中の会話にこれを入れることは今回は避けている。このことをここで附記してお断わりをしておきたい。

また、亜土の思い出に最晩年の母、籌子のために薬をもらいに、とくに成城の塚原医師宅に通われたことのあったこともここに追記しておきたいことのひとつである。しかし、かの女の最期を看とり、死亡診断書を書いたのは隣人の中澤医師（開業はしていない）であり、遠方の塚原医師ではなかったのである。当時の医療体制の不首尾とか医療の貧困を改めて考える。

村山籌子

——ナップ時代の友人による（1）——

話し手 松本正雄（第1回）

（高松にて）

（前言）

私は籌子研究をすすめて行く中で、どうしても蔵原惟人氏にお会いしなくてはならないということが分かってきた。それは知義の『白夜』をよむたびにわたしにささやきかけるものがあり、山崎功の「小石川原町」に接して決定的となった。しかし当時、蔵原は現役の仕事で多忙きわまる公人である上、知義も健在であって、過去の籌子のことで見ず知らずの私に会うことなどはありえないと私はあきらめていたのである。ところが蔵原の個人的な救援者であり、地下にもぐって活動していた蔵原のレポ役であった松本正雄が名古屋にて大杉栄関係の調査があるついでに高松まで足を延ばして、この際、籌子の墓に行き、また、やまさきに会って話をしたいと連絡があった。ひとつは私を首実検して蔵原に報告するという目的もあるらしいと察しられた。案の上、私は写真を撮られ、蔵原にみせられた筈であるが、その写真は私は見たことはない。しかも私が蔵原に、じかにお会いできるには、その後7年を経なくてはならなかった。

1973年6月3日、来高された松本氏はその夜はわれわれ同人の宅に一泊され、翌4日までの2日間、夕食をはさみ、徹夜同然に語り明かされ、籌子のこと、昭和一桁時代のナップ時代のこと、1930年代から40年代、さらに横浜事件のこと、戦後の文化運動のこと、さまざまなことを語られた。以下の聞き書は籌子について語られたことを中心に記録し、他のことは省略する。

ここで、松本正雄氏の生涯について紹介する。氏は1901年（3月4日）、東京浅草に生まれ、郁文館中学を経て青山学院英語師範科を卒業、神奈川県立湘南中学校英語教師となるが、1927年11月に平凡社に入社、「新興文学全集」編集に携る。28年10月、国際文化研究所創立に協力、29年8月、国際文化研究所の外国語夏期大学開校、教務主任、英語講師、同年10月、国際文化研究所を発展的に解消して、プロレタリア科学研究所を創立する。機関誌「プロレタリア科学」創刊。30年10月、平凡社退社、翌31年9月、平凡

社再入社（この間、満州事変起る）。32年、「プロレタリア英語入門」（鉄塔書院）出版。36年5月前後に平凡社をやめ翻訳、創作などの活動にはいる。38年、日本評論社に入社、のちに『日本評論』編集長、44年秋、退社、同年11月、横浜事件で検挙、45年8月、終戦により釈放。直ちに新日本文学会結成準備など文化運動に携わる。12月、日本共産党に入党、新日本文学会結成。46年2月、日本民主主義文化連盟創立に尽力、同年3月、『新日本文学』創刊、編集長となる。同年、日本ジャーナリスト連盟（のちのジャーナリスト会議）の結成、47年8月、文連の出版部長、事務局長となる。以後も数々の文化団体、労働学院設立にかかわり、52年6月、平凡社に再々入社、作家会議団員として中国、カイロに赴く。61年、『文化評論』編集委員、68年8月、日本民主主義文学同盟幹事、74年、『過去と記憶——ファシズムと闘った人びと——』（光和堂）出版、76年、この書により多喜二・百合子賞を受く。

概括していえば、松本氏の生涯は第1に米語米文学者として民主的英語学研究団体の組織者であり、また、その翻訳と紹介者（パール・バック、ハワード・ファスト、ステイブ・ネルソンなどの訳書）であり、新英米文学研究会を主宰したこと、第2はジャーナリストとして出版社で、また、雑誌制作の最前線で活躍したこと、第3は各種の民主的文化団体の創設とその事務局にかかわったこと、そして第4はその識見と人脈によりさまざまな機会に、さまざまな支援と協力を人や団体に対して惜しまなかったことである。1927年12月に、はじめて蔵原を訪れて以来の蔵原への長い個人的支援もそのひとつであった。

以下、Mは松本氏、Yはやまさきである。（文責はすべて山崎にある。）

Y わざわざ高松にお越し下さって感謝の至りです。

M 名古屋まで調査の必要がありましたが、村山箒子の例の墓に一度はどうしても訪れたいと長く考えておりまして、山崎さんの山崎功さんや蔵原への連絡のお手紙を契機として思い切って参りました。

Y 村山箒子に最初に出会ったのはいつでしょうか？

〔このやまさきの質問には特別の意味がある。ナップ時代の箒子の友人の中で松本は特別の関係があったからだが、それは松本が蔵原の個人的支援者でレポ役であったこと、その松本は蔵原への特別の感情と畏敬を抱いた箒子の心情を理解し、他方、好意を寄せる他の数多くの女性を一顧だにしない蔵原が箒子に対してのみは心を許していることを知り、その支援とレポ役を株分けして、蔵原と箒子との個人的な接触をあつた危険きわまりない時代に見守り、支援しつづけた唯一の同志だったからである。しかも、もうひとつの異例ぶりは箒子と親しかったナップ時代の友人はほとんど三角の家近く、いわゆる落合「解放区」に住居をもつ隣人の文人、芸術家たちだったが、松本はそうではなかった。それにもかかわらず、蔵原支援のために、あるいはそれにかこつけて、その松本宅をしげしげと訪れ、連絡につとめた箒子を知る唯一の証人が松本であったから、箒子個人への松本の思い出は他の箒子と親しくしたナップ時代友人たちとは異なる独得のものである。私が松本を案内して高松市郊外の紫雲山中腹にある箒子の墓に辿りついたとき、白髪の松本は昭和8、9年頃のベレー帽のかの女を追い求めるかのような姿で沈黙したまま立ちつくした。氏の『過去と記憶』の巻末近く、その折に撮影した箒子の墓のスナップを大きく掲載した松本の思いはその長い沈黙の継続にほかならない。また、松本氏があえて来高されたのは「過去と記憶」の構想の一環であったことをのちに納得しつつ理解した。〕

M 自分が箒子さんに逢ったのは山下徳治の家で新興教育研究会をやろうという話しあいの時だった。それは労働者、プロレタリアートの連けいによる教育をめざしたもので、日取りは1929年12月20日から25日のあいだではなかったろうか、と思います。そこに山下徳治、村山箒子、新島繁、伊東三郎、山口顕次などが集まり、新興教育研究所ができ、所長は山下徳治でした。それには次のような経緯があります。

1928年に立ち上った自然科学と社会科学の双方をふくむ科学運動の所産がこの研究所発足の背景ともいえます。さらに、28年11月に国際文化研究所が発足して『国際文化』を発刊しました。（これについては、1973年8月の『文化評論』を参照下さい）。29年8月頃には新興科学社が『新興科学の旗の下に』を出します。そしてこの両者があつまって、他の産研の人とかも加わりプロレタリア研究所が生まれ、秋田雨雀や蔵原らにより機関誌『プロレタリア研究』を出します。29年10月のことです。こうしたことが背景となりました。

Y 蔵原さんの本の獄中出版で、籌子がとくにお手伝いして出版できた本はどれでしょうか？

M レールモントフ『悪魔』（ロシア文学のひとつ）、改造文庫版（1933年）、『五月の夜』同じく改造文庫版です。日本プロレタリア作家同盟の『蔵原惟人獄中書簡集』も籌子の仕事です。[のちに調べたところ、『悪魔』には訳者蔵原の序文（1933年2月22日付）がついており、『五月の夜』（ロシア短編集）昭和9年2月刊には訳者序文はなく、巻末に松本正雄の「編輯者の覚書」が2ページに亘って印刻され、訳者に「自由の日」が来ることを望んでいる。また、作家同盟出版部刊であり、編者もまた同出版部とされる書簡集のタイトルは『蔵原惟人書簡集』（発行人は猪野省三、昭和8年6月29日発行）である。籌子の名はいずれにも登場しないが、原資料を揃えたり、ゲラ刷りを点検したり、全体の整理とか校正につとめたりの陰の作業に、かの女が従事したものと推定される。]蔵原の『芸術論』（中央公論社版、昭和7年12月刊）の獄中出版は山田清三郎が編輯して、巻末に8ページに亘る編輯者の跋である「蔵原惟人とその「芸術論」について」を誌している。籌子がこの本の作成にどのようにかかわって支援したかは山田氏にきいてほしい。

Y 蔵原さんの家族の名前で手紙の執筆上、筆名とか仮名の方の氏名を知りたいと思います。

M ^{しゅうこ}終子とか^{これひろ}惟郭とかは実母とか実父で実在、惟名は実兄、実名のひとですね。惟賢は詩人蔵原伸二郎の本名です。惟人の従兄ですから実在の人ですが、惟人氏が既決後は親戚、家族以外との通信は禁止されたので伸二郎の了解のもとに松本正雄宛の手紙は惟賢の名を使用した。既決後の惟賢は松本正雄とみてよい。これは手紙の上でのことです。蔵原章はこの松本の場合と同様に獄中の蔵原への援助、本の差し入れなどの必要上、蔵原の近親と相談して村山籌子が創作した自分用の架空の人物名です。

Y それで納得するところがいろいろあります。戦後、新日本文学会が出した『芸術書簡』では氏名の種明かしなしに惟賢宛とか章宛とかがそのまま印刷されているので読み不明でありました。

それでは蔵原さんへの個人的な支援の全体について、お教えいただきたいと思います。

M 支援は獄中の場合はさまざまなさしいれ、また蔵原の原稿や既に印刷された文章の収集、家庭の資金の配分とか家族の方への連絡です。地下活動の場合はレポとしての数々の連絡です。これらのために松本と籌子さんが協同で仕事をしました。籌子さんは蔵原の留守宅とか実家など自由に出はり出来ましたし、家族のどなたとも自由につきあうことが出来ましたから、本にしろ、何にしろ、なんでも相談し、実家の本棚など、自由に見廻し、出し入れして差し入れにしろ、貸借自由に働きました。その頃、松本の家は豊多摩郡高井戸町西高井戸にありましたが、かの女はそこに、ひんぱんに訪問してきてのです。それは1929年から32年にかけてでありまして、週に1度ないしは月に数回はありました。松本が蔵原を援助し、それに籌子が加わったのでした。

Y それはふたりだけの協同作業ですか？

M そうです。協同ですが、打ちあわせて、それぞれが動くのです。もちろんそれぞれが自由に、蔵原の意思とか状況に応じて支援したわけです。かの女はその器量と立場によって、私は私の役割によって、蔵原を支えて動きました。

Y 籌子さんとの会話で思い出すことはありませんか？

M 籌子は自分の女学生時代を述懐して、「私は他の生徒たちから、おかずこ姉ちゃんといわれて、親分みたいにおもわれていた」といったことがあります。また、水泳が好きであること、薬屋の千金丹の娘であることを述べ、その千金丹の薬をときどき飲ませてくれました。

〔松本氏はこの来高時の翌朝に、千金丹に行き、なつかしように、その千金丹がいまもあるかときき、その一袋を購入した。そのかなしくも、なつかしい様子をやまさきは見た。〕

Y 籌子さんの人柄というか人間について、どう思いましたか？

M かの女は一口でいうと、「天真爛漫の人」、「神様のような人」、「天女のような人」、「無邪気な人」です。

〔この四語表現は松本氏の用語表現のまま。氏はこれをくりかえし述べた。〕

Y 知義さんとの関係はいかがでしたか？

M 知義はわががままであり、かれの母はクリスチャンでした。その母を知義は大事にしていました。籌子はその中で苦勞があったと思います。かの女がカゼをひいて熱を出しても、トムさんは籌子に「働け、働け」というらしく、そのことをかの女は私に知らせて、「うちの人はおもしろい人よ」という評言をしました。うらみ言をいう口吻とは全くちがうのです。私には不思議な高貴さにみえました。

知義が「汚れて」も（精神上のこと）、籌子はヨゴレナイ人とおもいます。

Y 犬を飼っていたのは趣味でしょうか？

M 生活費のためと思います。

Y 純真人でしたが、警察に対してはどうでしたか？

M 警察には用心深い人でした。階級的な義務を身につけておりました。自分の妻は松本八重野といい、Women's Strike for Peace に属し、丸木俊子と同じでした。そういう人たちに類すると思います。

Y 蔵原さんと籌子さんとの関係について、お訊ねしにくいことですが……。

M これは仮定のはなしですが、籌子が村山と結婚していなければ、蔵原と結婚してもよかったと思います。

〔このことばには蔵原の気持ちはのべられていない。また、村山と結婚していなければ、蔵原に出会うことはないともいえるし、また、村山や蔵原の抱く思想や哲学に籌子が理解する立場に立ったかどうかも分からない。人間の生涯に仮定をつけても真実がつきとめられるとは限らない。また、この発言は、トムさんの妻であり、亜土の母である籌子が村山と別れて蔵原と結ばれるということなど全く視野のなかにないことを示している。〕

Y トムさんの「転向」といわれているものについて……。

M 「転向」はひとによってさまざまで、かんたんにいうべきではありません〔と松本氏はとくに語気をつよめていわれた〕。「転向」しないための「転向文学」というものもありえます。村山の場合は新協劇団再建をやる位ですから、「転向」ではない、というべきです。

Y 朝鮮行はどうみられますか？

M 村山の朝鮮旅行は、朝鮮で芝居をやるためであって、別に軍部に協力するためではなかったのです。向こうに行ったら、生活できる。戦争末期ではあり、命拾いにもなるし、旅の恥のかき捨てでやれるということもあったでしょう。

〔しかし、この間、置いてきぼりの東京の籌子の心細さをやまさきは聞いていたが、口をはさむことは避けた。〕

Y 箒子さんの童話については何かの思い出はありますか？

M 1929から30年の頃かな、立野信之とつよく運動上の接触のあった頃ですが、立野の最初の妻、香山春江さんが箒子の童話の弟子だったと思います。

〔松本はのちに『過去と記憶』の中で「立野の妻、香山春江……は、村山箒子に弟子入りして童話を書くようになり、『少年戦旗』などにいくつか作品を発表した」云々、同所202ページとかいている。〕

Y 箒子の英語についてはいかがでしょうか？

M これはできたと思います。『国際文化』12冊に箒子さんがかいたのかどうかは調査の必要があります。

Y そのほかの思い出は？

M 箒子さんにごちそうになったことはないように思います。しかし松本のほうでは、かの女にメシを出したことが記憶にあります。箒子さんが私の子供、幼児のとき、箒子のかいた童謡か童話かの絵本か絵雑誌かを来宅時にプレゼントされたことはしばしばあったように思います。

さし絵はトムさん以外のものもあったように思います。

Y 箒子さんの性格についてはどうでしょうか？

M かの女は性格的にはコスモポリタンです。〔松本はコスモポリタンを強調して述べた。〕宮本百合子は箒子を「かわいそうね」とみていた。〔これは自分と同じブルジョア出身の性格からぬけ出すことができないコスモポリタンの宿命（「子供っぽさ」）をみてとったことによると松本はいいかげである。〕

箒子は百合子を「変わっているね」とみていました。〔この松本の言はやまさきの記録のまま、ここにかいたが、その意味がいまはわからない。同性愛的性格の指摘であろうか。〕

私は講談社の『日本現代文学全集』月報80（1969年10月）にTomについてエッセイをかきましたので、是非みてほしい。〔これは「私はトム・ファン——村山知義との長いつきあい——」という一文である。箒子にも言及している。短文ではあるが村山夫妻に言及した貴重な文章である。〕

（あとがきに代えて）

松本氏は2日間に亘り、やまさきと積木同人のために次から次へと話をいただいたのですべてを記録すれば何万言か何十万言かになるのだが、ここでは、箒子に関連する部分のみの聞き書きにとどめた。

2日目の午前中は千金丹に案内して、現在もそれのみを販売する漢方薬の千金丹を購入し、岡内弘子さん（ドラッグストア千金丹の主人格）のご好意で会社の車で長田うどんまでドライブ、途中、岡本の工場用地などにも寄り、また、村山家の今後をきづかう話までしていただいた。弘子さんは箒子さんがパセリが健康によいといったとか、トムさんが娘の祥子が箒子に似ているので、祥子を愛してその肖像をかいたとかの話がつづいた。弘子さんは箒子の弟、桂三の妻であるから、義妹であって血縁ではない。しかし岡内家では箒子のことをもっとも大切にしている人であった。いまは亡い。

松本氏は思慮ぶかく慎重な人であり、人や組織に迷惑をかけないというのが信条のようにみうけられる。『過去と記憶』でも多くの人が登場するが、そういう配慮からか、知悉していることの、ごく一部しか語っていないと思われる。私が箒子の墓に案内したことも公には一言も語っていないし、この墓を訪れたことをニューヨーク日米新聞（NO.1414、1973年6月28日）に小さな記事（松本「一つの機縁」）にしるしたときも、やまさきはY教授とされていた。

松本氏は1964年6月に、軽い脳溢血に倒れ、回復して日常活動にはいり、75年暮れに体調を崩され、誤診があって、治療が適切でなく、76年4月15日、総胆管結石による閉塞性黄だんのために亡くなられた。本来ならば、もっと長生きされえたはずであり、じつに残念なことである。心からご冥福をおいのり申し上げる。

なお、重ねてここに追記したい。私は籌子の墓に何十人となく、ご案内する機会があったが、お墓に辿りついて、そこに立つとき、松本ほどに押し黙って肅然と長く佇んだ人は他にはおられなかった。それは籌子と共に生死をわけあった同志愛というか友情というか、そうした尋常ならざる稀有な険しい日々を共有したことをおのずと語るののである。

話し手 松本正雄（第2回）

松本八重野

（ご自宅にて）

（前言）

1973年6月3日から4日にかけての来高時に松本正雄氏のお話を伺った。5ヵ月後、その年の11月14日に東京の松本氏のご自宅を伺い、同日の午後5時から9時30分まで夕食をいただきつつ、お話をもおねがひした。村山籌子について重ねて思い出を語って下さったので、内容にはダブった部分もあるが、ニュアンスの異なるところもあるので、それをここに記録したい。八重野様はご夫人であり、籌子が松本宅を訪れた昭和一桁時代から、籌子を迎え入れた当事者のひとりであり、かの女をよく知る方であった。

以下、Mは松本正雄氏、Hは八重野様、Yはやまさきである。

Y 籌子に最初にお会いしたのはいつでしょうか？

M それは高松でも申しましたように、昭和4年（1929年）で新興教育研究会をつくる時でした。

かの女がしきりに松本宅にやってきたのは、昭和7年から8年（1932から1933年）にかけてから、昭和9年の頃まででしょうか。昭和10年以降はみんなお互いに遠慮して会わなかったと思います。危険人物視されているので、会うと不必要に怪しまれ、迷惑をかけるということがありましたから。私は1935年に杉並の大宮前に移転しました。その家へ籌子さんがきたことはありません。

1932年に蔵原がつかまり、1940年秋に出獄するまで、かれは、ずっと刑務所にいました。私と籌子とはその支援を共にしましたが、蔵原が下獄して札幌に送られてからは通信で支援するしかなかったのです。かれは結核で病監に移り、それがひどく重くなって東京に移され、刑期はおわっていませんでしたが、出所して、北里病院に担架のまま入院されました。私はそのかれを見舞ったのですが、こないほうがよいといわれたのです。

籌子さんは見舞に行ったかどうか、あまり行っていないのではないか、あるいは意識して全く会うことはなかったのではないか、と思っています。

〔私はのちに蔵原氏との聞き取りの中で、一度だけ籌子が北里病院養生園を尋ねたことを伺っている。〕

Y 籌子さんの人間性についての、ご感想は……。

M そうですね。いままでにも申したかも分かりませんが、軽薄とか俗とかに全く関係のない、心のうつくしいひとでした。

これは籌子さんがついていた歯医者さん、女医さんでしたが、その女医さんの夫であった方から籌子さんが君（松本）を愛しているといっていたよ、といわれてびっくりしました。もちろん冗談ですが、そういうことをいっても、清潔さのみがただようのです。「愛している」というのは「好ましい」ということでしょうか……。

M、H かの女はあこがれと尊敬を感じさせる人です。

M 私は高貴さを感じました。

M、H 服装はハイカラですが、嫌な気は全くなく、服装の着こなしが実に清楚でうらやましくみえました。

H 無地が多く、上下のとりあわせもよく、スカートとカーディガンの調和もよく、帽子〔ベレーが多かった〕も似合っていて、ハデにみえて地味なのですね。そこの所が見事でした。

Y 箒子さんの女友だちから、かの女が好きな人が毛深かったらどう思うかときかれたことがあるといわれました。蔵原さんは毛深い人なのですか？

M かれは毛深い人です、熊のようなひとですよ。(笑) いつも、それを織って何かを作ったらよいとかれにいつているんですよ。(笑)

Y それで納得がきました。(笑)

ところで箒子さんが蔵原さんの獄中出版の際に、かの女が援助、協力した本をたしかめたいのですが、まえにすでに教わっていますが、その本を手にとって、たしかめればありがたいと思います。

〔ここで松本宅に所蔵する三点を書架から取りだし、やまさきはそれらを奥付、表題、収録作品を中心に点検した。蔵原惟人『書簡旅行記』文化集団社発行、昭和9年4月21日発行、レールモントフ『悪魔』(長詩)改造文庫、昭和8年7月15日発行、訳者序文、ゴーゴリーほか『五月の夜』(ロシヤ短編集)改造文庫、昭和9年2月20日発行、編集者の覚書、松本正雄、1934年2月。いずれも箒子の助力、協力によって公刊されたものという。『書簡旅行記』は来高時には言及のなかったタイトルのも。その前身の『書簡集』は指摘があった。〕

Y 箒子さんの水泳について本人から聞かれましたか？

M 水泳は私にも自慢しておりました。じつは私も水泳が好きで、得意であり、少年時代〔中学生時代〕、鶴沼の海岸で泳いだものです。

Y 箒子といっしょに泳いだことはおありですか？

M 箒子さんと泳いだことはありません。

Y 先程、かの女の帽子のベレーのことがありました。関連してお聞きしたかったのは蔵原さんの帽子のことがあります。手紙などで、よく蔵原さんの帽子の話がかかれています、どんな帽子なのでしょう？

M それはソフト、中折帽ですね。

H ネズミ色だったと思います。

Y 箒子さんの印象ですが、奥様とのやりとりでの思い出はございますか？

H 私たちの子供に約束して、おはじきとかなにかとか、もってきてくれました。今日は何もないからといって、口紅をいただいたこともあります。

M、H かの女は岡内家が大きな商家であることはいつも心の奥では前提にしていました。それをいいふらすような人ではありませんが……。

M 同じく大きな名家の出身である宮本百合子と箒子とはちがってました。仲好くなるとは考えられないし、親しさを感じてもいかなかったと思います。百合子からみれば、箒子は子供っぽくみえたと思う。百合子さんのようにならなかった所に箒子さんの面白味があります。

たたき上げた庶民出の人と、家柄の出自の人とはどこがちがうものです。箒子さんは後者の人です

が、そのことの良さの面を生かした心のきれいな、一寸、真似のできない雰囲気というか、香りをもった人でした。

M、H うちの子供が5歳か6歳か、幼児のとき、籌子さんを「おネコさんのおばちゃん」と呼んでいました。それは『子供之友』の、かの女の作品からです。その絵雑誌をプレゼントして下さるのがつねだったからですね。昭和8年か9年頃かと思います。

Y じつはその頃、実名をだすのは『婦人之友』や『子供之友』に迷惑がかかるので、籌子さんはおネコさんシリーズの多くを「古川アヤ」の筆名をつかっておりました。「アヤ」は章の読みです。蔵原章の架空名の個人名の読みです。「古川」はどこに機縁があるのか、探しています。

M [はここで、にこっとされて] 蔵原のペンネームのひとつは「古川莊一郎」ですよ。

Y そうですね、それは「古川」そのものですね。やっと分かりました。「古川アヤ」は〔古川莊一郎〕の「妻」の意なんですね。これはおどろきですし、私には感動ものです。

M 佐々木孝丸の妹はたしか「アヤ子」といいました。文字はいまは分かりません。

Y 「章」は籌子さんの実妹の「章」からきたものと考えています。この章（アヤ）さんは幼児のときに亡くなられたのです。

落合ユキコの筆名も当時、用いています。落合は長く住む上落合、下落合、落合「解放区」、いわゆる落合文士村からくるとするのが最も自然な解釈ですが、ユキコのほうが分かっておりません。

ところで支援者としての籌子の生き方です。かの女は自分の名前を有名にしようとしなかったし、組織にもはいりませんでした。それは第一義の仕事を大切にしたいためだとおもうのですが、いかがでしょうか？

M そうだと思う。かの女はそういう人です。人間の最もたいせつなことはそこにあります。組織に加わっていないのは、そういうことは意識的に避けて、助けたい人のためにそれはやらないで、動くのです。

Y 逮捕されたことがないのも、かの女のそういう、自分の性格や能力をわきまえての行動様式によると思うのですが……。

M そうです。逮捕回数や拘留期間の長さに値打ちがあるのではなく、何をするために逮捕されなかったかが重要です。つかまることを手柄みたいにするのはおかしいことです。

「転向」でも、何のために「転向」したか、が重要です。「転向」にも幾種類ものものがあり、たんに「転向」をわるいものときめつけるのはまちがいです。問題はその中身です。「転向」には一人一人、ひとつひとつ、千差万別の種類があります。

籌子さんは逮捕されないようにして救援活動は活発にする。そこに自分の役割をみいだしていたのです。

児童文学では、かの女は政治的に子供を引っぱりだすことに反対しました。かの女の意見に蔵原は賛成したであろうと思っています。

Y 今日はありがとうございました。

(あとがき)

この日は夕食もいただき、6月のご来高の思い出もあって、なつかしい思いに浸ったが、お元気であられたので、まさか松本氏との最後の出会いになるとは予想もしなかった。その後、『過去と記憶』、ネルソンの訳書『義勇兵』『ドキュメント昭和50年史』などの贈呈をうけ、『ニューヨーク日米新聞』本紙をいた

だいたりして、ご活躍のほどを察していたのだが、体調をわるくされ、誤診があって、思わぬご不幸を迎えられた。そのことは奥様の聞き書の際に記録したい。人と組織を支えることを中心とした松本正雄氏の地味な生涯は蔵原氏の分身（合法面）のような生涯であったから、その蔵原を精神的にはもっとも愛しつづけた籌子のことを証言するにふさわしいナップ時代の友人であったことをここで強調しておきたい。

なお、文中に言及した落合解放区、落合部落については目白学園女子短期大学国語国文科研究室『落合文士村』（双文社出版、昭和59年2月刊）が包括的に述べている。また落合文士村の大きな絵地図が東京都近代文学博物館によって発行され、文士たちの住居番地の一覧と居住場所が全面に示されている。

村山籌子

——ナップ時代の友人による（2）——

話し手 松本八重野

（ご自宅にて）

（前言）

松本正雄氏が1976年4月15日にみまかれた、翌1977年の12月21日にご訪問させていただいた。前日にお電話してお会いすることになった。本当によくできた奥様である。正雄氏のご存命中から伺っていたことであるが、油絵をよくして、仲間たちと展覧会を開くなど、しろうとながら、閨秀画家とってよい方である。のちには個人画集をいただいた。

訪問してまず松本正雄氏のご霊前におまいりする。永田一脩氏さつえいの写真（『過去と記憶』巻頭の写真の原写真）がローソクに照らされている。ジョン・リード『世界をゆるがした10日間』下巻の文庫本がまつられている。これはさいきん仕上がったものという。おわって座敷のコタツにはいり奥様とお話をした。

以下、Hは奥様、Yはやまさき。

Y ご病気の経過について……。

H 昭和50年（1975）の秋に発病して、年末に入院しました。検査の結果、ガンのうたがいがあるといわれ、医者から1ヵ月ももたないといわれ、びっくりしました。本人はひとりで小用にも行けたのです。家族には、じつに不思議におもえました。結局、ガンということで、ガン・センターに移ることをすすめられ、非常に早く（1、2週間で）ガン・センターに移り、検査の結果、ガンではない（85%以上の確率で）といわれ、これまた、おどろきました。石が胆のうにあるらしい、と。

結局、誤診があってこの間に治療がおくれて、胆のう炎を放置したことが命とりになりました。

Y それは誤診の典型ですね。

H そうです。全くの誤診です。本人が死亡したあと、どうしても調べてもらいたいと思い、解剖した結果、ガンは全くなく、胆のう炎であったことが判明したのです。誤診の典型です。

それを思うとなさげなく、本人に申しわけないことをしたのです。本人が生きていてくれたらといつも思います〔と奥様は嘆かれた。〕本当に残念です。

血圧のほうは全く異常がなく、問題は胆のうだけでした。

Y それを伺って、大きな病院でも、信頼ができない、何か初歩的というか基本的なミスのような気がし

て、なさないと思います。

[しばらくして話題を村山籌子のことにつす。]

H かの女と知りあったのは松本正雄と同時です。松本を介して会ったのです。松本正雄と切りはなして、籌子さんに触れることはできません。

籌子さんはしばしば松本の家に来ました。松本が留守のときは、八重野に物をいい、私たちの子供と遊んで、かれらと約束をしていました。それは『子供之友』をもってきてくれること、おはじきをもってくるからね、といった約束です。子供たちはおばちゃん、おばちゃんといって慕っていました。長女は松本菊で昭和3年1月5日生まれ、松本姓が好きでいまも松本姓を使用しています。長男は松本唯史(ただし、昭和6年2月19日生まれ、現在は専修大学に勤務しています)でありますから、昭和8年とか9年とかは、かれらが3歳とか4歳位のときですね。

お祭りにいっしょに行こうと駅まで見送りがてら、籌子さんと祭りに行って楽しんだことがあります。そういうときは、籌子さんが子供たちをつれだしたのです。

Y そのほかの印象は何でしょうか？

H 素敵な服装で、よく似あっていました。ベレー帽をよくかぶっておられました。

私は籌子さんがいつも童話をつくるのをうらやましく感じていました。

この『新英米文学研究 第7号』をさし上げます。松本の追悼号となっていて、年譜もあります。[これをみると、年譜のほか、追悼文もあり、松本を回顧するには大事な文献のひとつである。]

村山籌子

——ナップ時代の友人による(3)——

話し手 岩崎 昶

(ご自宅にて)

(前言)

籌子と親しくしたナップ時代の仲間のお名前について村山知義にお訊ねしたとき、岩崎昶^{あきら}の名は全く告げられなかった。演劇人ではないためであろうが、以下の聞き書にもみられるような特別事情から、知義は言及を避けたと思われる。本来、在世中の知義に、岩崎と籌子の関係について、あえてご質問する機会があれば、どのようなご教示であったかと興味を覚える面もあるが、知義存命時であれば岩崎はやまさきにお逢い下さらないということもあり、そうであれば籌子がかいた岩崎宛の手紙などの存在をやまさきは知らないままであったかと思われる。ともかく、人間の問題は簡単にはいかない。

やまさきが岩崎氏にお会いしなくてはならないと考えたのは、近藤きよが籌子の「情事」の相手に岩崎の名を挙げたことにある。もとより、日本初期のアニメといわれる「三匹の小熊さん」を作った機縁をうかがいたいこともあった。

お会いした日は1977年11月9日の午後の2時間余、世田谷のご自宅であり、風邪気味のなか、お話をいただいた。知義はこの年の3月になくなられていて、岩崎の述懐内容を検証しなおすことはできない状況の中で聞き書をえたのである。

以下、Iは岩崎氏、Yはやまさきである。

Y 今日のご無理を申し上げます。ありがとうございます。籌子さんを最初に知ったのはいつでしょう

か？

I トムと結婚後、そのすぐあとで知りました。トムさんは一高（旧制）では、2年上の先輩です。自分は後輩ですが、その頃はトムさんを知らず、トムさんがドイツから帰国直後に知りました。知りあったのは、トムさんの家に私が出は入りしていたからです。それは、とくに映画同盟（プロキノ）以後によまったのですが、映画同盟ができる以前から、トムさんの家、あの三角の家に行きました。

Y 籌子さんとはどのようなお知りあいに？

I トムの家に行くと、籌子さんも話の中にはいってきました。お茶だけを出して引っこむということではなかった。自分がトムさんより下級だから、気がおけなかったのだらうと思います。

〔これを伺って、籌子が岩崎に自然体の親しさをもったように思われる。籌子は人見知りする人で、知義の仲間や知義の客からは距離をおく人だったから、これは（お茶を出して引っこまずに、そのまま同席して話に加わる）は珍しいことである。〕

その頃の思い出ですが、ルナチャールスキーの「解放されたドンキホーテ」という芝居をしろうとばかり、当時の仲間たちでやりました。ムルチオ伯をトムさんがやりまして、しろうとでも芝居はできると、みんながささやきあった記憶があります。トムさんは芝居がうまかった。しかし、今思うと、当時の芝居の水準が低かったせいであるかも知れません。

Y 籌子さんの印象はいかがでしょうか？

I トムさんが結婚したのをみて、ひどく近代的で、インテレクチュアルな女性をもらったなあ、という印象をましました。千金丹のお嬢さんというような印象はなかったので、漢方薬の千金丹ということを引きいておどろいた記憶があります。

ところで籌子さんについて、とくにお礼を申し上げたいことがあります。〔といわれて、岩崎氏は積極的に語をついで〕私がプロレタリア映画同盟（プロキノ）をやっていて、資金がなく困り果てていたとき、その資金作りに自由学園の宣伝映画をつくらせて貰い、かなりの資金を頂戴しました。この宣伝映画は授業風景とか自由学園の校内とかのドキュメンタリ風の映画で、35mmの2巻か、3巻かのもので、今も自由学園にのこっているとおもいます。このことで、籌子さんに大いに助けられたのでした。

〔これは私からみると、自由学園には松井志づ子さんが仲立ちされたとおもわれ、陰の協力者に松井がいたと推察している。籌子は、松井さんに感謝していると思われ、いまは亡き籌子さんがプロキノのために、ひとはだぬいだことと、松井志づ子という親友がこれに協力した二人三脚を改めて考えたことである。〕

Y その宣伝映画のほかに、アニメの「三匹の小熊さん」製作が思われます。あれも岩崎さんの製作ではありませんか？

I 〔全く忘れておられて、はじめはやまさきの言のみをきいておられた。〕

Y 『婦人之友』誌の当時のものに「線映画」として何コマかをイラストにして掲載されています。

I それは「線映画」でなく、「線画映画」というものです。線画による映画という意味です。「線映画」はまちがいです。ミスプリですね。今にいうアニメーションのことですね。

Y 最近、復刻されて婦人之友社の行事などで再生しています。私もそれをみて楽しんでいます。じつに奇想天外な粗筋ですし、トムさんの映像もじつによくできています。籌子さんとの絆を示す映画作品として、この「線画映画」の意味、その先駆的な意義の重要性を私は確認したいと思います。〔岩崎氏はこの自らの作品を忘れられておられるように見受けた。劇映画でもないし、自由学園の宣伝映画という

ドキュメンタリーでもないから、やむをえないとはいえ、アニメーションとしても先駆的なものの1つであり、トムさんの童画の映像化としても注目される、この作品がご本人の記憶になかったのは残念であった。]

ところで籌子さんは映画好きのひとでした。そのことも岩崎様への魅力であったと思われませんが、映画のことを話題にして話しかけられたのでしょうか？

I 自分に対して映画のことを話題にして話しかけられたことはありません。自由学園のお友だちとはいろいろやっておられた風でしたが、私は専門家ですから、いいにくかったのかも知れませんね。

[これはやまさきにとって、じつに意外であった。それであれば、何をテーマに、このふたりは話したのであろうか。]

Y かの女から手紙をもらったことはおありでしょうか？

I 手紙はよくもらいました。[と突然にいわれて、やまさきはおどろいた。これに関連して、次のように述べられた。これは重要なことである。]

トムさんが別の女性と結婚したく、籌子さんとの離婚を考えていたことがあります。そのとき、トムさんは妻の籌子さんが友だちに宛ててかいた手紙をかき集めて、かの女に証拠として示したかったので、トムさんから、お前の所に来た籌子の手紙を全部返せと言ってきました。私は考えあぐんだのです。手紙は私信であって、私宛のものだから、です。その頃の、ふたりの仲は険悪だった。手紙は毎日のように私の所にきました。ときには速達で部厚い手紙で、いろいろ感想めいた文章がかきつらねてあります。じつにハズミのある手紙です。おもしろいというのは、たんなる愉快ということではなく、感銘深く、上手な、うまみのある手紙でした。

Y 何通位あったのでしょうか？

I 50通から60通位はあったであろうか。かの女はじつに手紙をかくのがうまく、おっくうがっていなかった。流れるような文だった。あの人の手紙は格別のものです。

Y 百通はなかったのですか？

I そんなにない。いまいったように、50通ないし60通程度です。60通位あったと思います。それらを全部、その折に、トムさんに返しました。[すべての手紙を例外なく返したのか、都合のわるい手紙はすてたのか、など一切不明]

Y それはわたしにはまことに残念なことです。[やまさきの心は氷りついでしまった。]

I それが今、トムさん宅にあればじつによいのだが……。

Y トムさんに、その手紙のその後についてきいたことはおありですか？

I それらの処置について、トムさんにきいたことはありません。

Y それは獄中への手紙ではないのですね。

I それらは牢屋宛のものではありません。私が牢屋にはいったのはずっとのちのことです。その頃は、もはや籌子さんとはつきあいがありませんでした。

Y そうすると、いわば牢屋の外での、一般の市民間の手紙ということになります。普通の住所あての手紙ですね？

I その頃、私は池袋に住んでいました。その池袋あてのものです。

Y その住所とか番地はご記憶にございましょうか？

I 豊島区雑司ヶ谷1丁目、ここまでは確かです。その1丁目のつぎは600台か700台位の番地でした。そこあてのものです。かの女はせせせと手紙をかいてよこしました。

Y かの女は手紙をかく名人でしたが、ほとんどは獄中の人あてのものです。娑婆のなかで、特定の人に手紙を何十通とかくのはよくよくのことですね。〔やまさきはこの手紙のことを話すことで岩崎氏は篝子との「情事」(秦きよの表現)の実態を間接的に告白されたものと思った。〕

I それらの手紙を全部トムさんが回収したあと、手紙はもう篝子さんからこなくなりました。そうして、もう文通はしないということになったのです。〔やまさきからは意見もあり、感想もあるが、こうした場合、沈黙して拝聴するだけにおわるのが常である。〕

Y そうすると、その後はかの女と顔もあわさない関係となったのでしょうか？

I いいえ、ときどき、われわれの会合で顔をみることはあったが、個人的につきあうことはなかったのです。

Y どんな会合ですか？

I われわれにはいろいろな会合があります。〔といわれて、具体的には何もいわれず。〕

Y どこかで会うことはあるのですか？

I はい、逢うことはあっても、一寸、お辞儀をする程度か、話をしても、会合上の必要な用件のみとなりました。

Y 篝子さんの最晩年の鎌倉に行ったことはおありでしょうか？

I 行ったことはありません。

Y お葬儀とかお別れの会とかは行かれましたか？

I あまり覚えておりません。

Y お別れの会のプログラムに葬儀委員の名に岩崎さまの名はありますか？

I 覚えていませんね。〔このあたり、どの程度のご記憶でいわれているのか、よく分からない。〕

Y かの女について、全般的な印象を改めてお訊ねいたします。

I 自分には、かの女が二重人格か二重生活の人にみえました。〔と岩崎氏は真剣な顔でいわれる。〕第1の顔は毎朝の食事や垂土坊の世話などの日常生活であり、これが廻らなければ生活はできません。しかし、第2の顔は頭の中に別の世界があって、ファンタジーがうずまいている〔このことばを岩崎氏は使用する〕ということで、これらの両世界がつかないのです。ですから、夫にとっては、自分に一所懸命かしづいているという風にはみえないかもしれません。

しかし、篝子さんは結局のところ、生涯、トムさんのみを愛したのです。かの女はトムさんのみを愛しつづけたと自分は思っています。〔と岩崎氏は強調された。蔵原への愛を強調したくないかのようにもうけとれるし、やまさきが岩崎氏とのことを知っているかも知れぬことを予想して、自分と篝子との関係のなきことを言外に述べたとも、あるいは篝子の生涯を「恥辱」から救いだすことを願ったともうけとれた。〕〔このあたり、ナッブ時代の他の友人たちとはニュアンスを全く異にする意見であることに注意。これはなぜであろうか。〕

Y 〔映画「小林多喜二」に村山篝子も登場しているので、岩崎氏に訊ねることにした。〕

「小林多喜二」(今井正監督)をごらんになったと思いますが……。

I あれは自分の新星映画とは全く製作者が異なります。

Y これはうっかりしておりました。そうすると、私の質問は的はずれとも思いますが、あの中の篝子さんは本人のイメージとどうちがうのでしょうか？

I 覚えておりません。あの中の宮本百合子はよく感じが似ていて、われわれはタメ息をついたものです。篝子の場合、それが無いとすると、あまり似ていなかったのではないかと思います。しかし、ま

た、つよく記憶にない所からすると、感じは出ていたのではありませんか？

映画の話ではありませんが、近藤さんはご存知ですか？〔岩崎氏はいきなり「籌子さんに親友がいましたね？あの近藤、下の名前は何といましたかね？」と、私がおの名を避けたいと決めていた友人に言及されたので喫驚したのだが、心を静めて〕

Y よく知っています。〔やまさきはこの日、近藤きよのことは直接に触れずに岩崎氏のお話を伺うことを旨としていた。そうでないと、岩崎氏の側に警戒心が先行して自然な思い出話を得られないと考えていた。その近藤の名をご自分から挙げられたので、近藤証言の真実性ははいよいよ明らかであると思った。〕

I あの人は元気ですか？〔と、しきりに、しかも、つよく執拗に聞かれた。〕

Y はい、元気です。

I お会いになりましたか？

Y はい、会ったことはあります。〔しかし、その折、近藤の述べた籌子の岩崎氏への思い入れとか「情事」の表現など、すべて、ここでは触れなかった。〕

なぜご存知なのでしょう？

I あの人の主人は眼科医で、私は診断をうけたことがあります。あの主人は若くして亡くなり、悔しいことでした。

近藤きよさんはお元気ですか？

Y はい、先程も申しましたが、元気です。

〔何度も何度も、きよさんのことをきかれた。やはり籌子の岩崎氏との逢瀬にきよが加わり、三人で逢ったことがここで間接に示されている。当時の籌子が親友きよを誘っていることに、この逢瀬のひとつの小さな公然性がある。〕

〔じつは、まさにこの日の午前中に、婦人之友社で同級生の千葉貞子（旧姓、内藤）さんから、近藤さんは元気であるときいたばかりであったのである。しかし、ここに付記するのだが、この日の夜、妹さんの秦美代さんに電話し、さらに近藤きよさん本人に電話をしたところ、本人は血圧が高く、他人には会いたくないとの理由で、今回の上京でのやまさきはきよさんに会うことは断られた。私は、岩崎氏より籌子が60通程度の手紙をもらったと旨、伺いえたことを頭において近藤きよさんのご意見を直ちにきくことを目指したが、その機会を失ったことになった。〕

I 亜土さんから、いろいろと、資料をだして貰っていますか？〔と、岩崎氏は資料提供を亜土氏からうけているか、とつよく、きく。〕

Y はい、それは必要なもの（ハードもソフトも）は何でも提供をうけていますし、とくに思い出話とか、私の質問にはすべて応答下さっています。

I 亜土には、もう数十年、逢っていません。子供のときのことしか、知りません。

Y 籌子さんのことですが、もしも、女性としてつよき女性か、よわき女性か、とお訊ねすれば、いかがでしょうか？

I それはつよき女性です。〔疑問の余地もないという顔でこたえられた。〕

ところであなたは高松の人ですか？〔念をいれてきかれた。〕

Y そうです。〔とこたえるが、岩崎氏は不思議なお顔であった。私を高松の純血種とみたくない風にみえた。〕

別事ですが、当時、プロキノが撮った独自の映画は今でもみられるのでしょうか？

I それは多くのフィルムは外側の穴の部分がいたんでいて、むつかしい。つまり、ネガにしてポジにするのがよいのですが、すべて安くあげるためにポジで1枚撮り、すなわち正式のコピーができないのです。要するに一枚撮りフィルムがよろしくないのです。劣悪化しているので再映がむつかしいのです。現在、のこっているのはアカハタ・ニュースに保管されているものです。それらは演技をうつした劇映画ではなく、すべてドキュメンタリーニュース風のものです。

Y 手紙のことですが、篝子が蔵原にかき送った手紙をトムさんは回収していません。これはなぜでしょうか？ご意見はございませんか？

I それは蔵原さんには、トムさんが一目おいていて、いえなかったのだらうと思います。自分は下級の若造ですから、返せとやってきたのだと思います。〔と笑いながら、岩崎氏はいわれた。〕

あの手紙がのこっておればいいのだがね。〔としきりにいわれる。〕

Y トムさんはその手紙を焼いてしまったのでしょうか？

I あるいは、そうかも知れませんが、しかし、いまものこっているかもしれません。あの手紙は、しかしトムさんが読んでも、はっきりした離婚の証拠になるようなものではなかったと思います。

Y それにしても牢屋にいない他人に、そのようにひんぱんに手紙を篝子さんが出すのはよくよくのことと思います。特別の思いを感じます。

I 〔そうかも知れないという顔つきである。わざと、とぼけておられたように思われた。〕

Y 〔やまさきとしては、もう少し具体的にお聞きしたい篝子さんとの関係が念頭に去来したが、初対面の人に、これ以上、くりかえして、また中身にふみこんでお訊ねすることができなかった。インテリ然とした岩崎氏の表情や人柄にはそういう厳しさがにじみでておられた。私が一步か二歩、ふみこむと怒りをのべられたかも知れない。〕

I トムさんという人はわれわれに、いいことも一杯教えてくれたのですが、悪いことも教えてくれました。例えば、夜遊びのこと、夜おそく酒をのむことなど。〔これは問わず語りに岩崎氏がやまさきに述べられたことである。〕

(あとがきに代えて)

この日、自由学園の友達にお逢いになられていますか？とたびたび、きかれたのは近藤きよを念頭においていたことと関係があるのか、あるいは自由学園の宣伝映画の思い出が何より念頭にあったためか、ともかく、岩崎氏はナップやプロキノの仲間のことには全く触れないし、紹介してくれた川口さんのことなどに全く言及しなかったことなど、不思議なことばかりである。自由学園の友だちにどれだけ接して資料あつめをしたかをしきりにきくのもそれをとくに推せんしているのか、他に目的があるのか、わからなかったが、岩崎氏が慎重で用心ぶかく、本当の記憶のすべてをやまさきに語っていないとの印象をもっている。非常におだやかで人柄のよい人だと思われるが、シンのある人であって軽はずみではない印象がつよく、いったいいいことと、いったいはならぬことを峻別しているとお見うけした。

やまさきは個々の具体的な思い出について何年にこう、何年何月にこうという日付や場所を特定化することを岩崎氏にお伺いしたが、それを嫌がられた。50年前のことだからと何回もつけくわえられた。こういうことも岩崎氏の用心ぶかさ、したたかさと関係があると思われる。

篝子についても美化した思い出のみをもっていないが、さりとして知義をほめるわけにもいかないので、言葉をえらんで慎重を旨としたのであろう。そういう心境の中で、風邪気味の中でやまさきに会って下さったことに岩崎氏の雅量と温容をみとめたい。

この日、さいごに、『女人芸術』での白黒のXerox写真による籌子の肖像をおみせして、本人に似ているかをお訊ねした。「これはあまり似ていない」といわれた。そこで改めてやまさきは、籌子さんは美人であるか？と、おききした。「それは個人の趣味だから」と笑いながらいわれたあと、真顔になられて「自分は美人だとおもわない」といわれ、ここでも「何しろ50年も前のことです」とつけ加えられた。

岩崎氏のことばにいう「ファンタジーがうずまいている」籌子の第2の世界に自らも呼応して籌子を精神的に助けた映画人、岩崎昶という人物と関わった籌子像をどう彫琢するかが私のあたらしい課題となった。